

第二戒 主の御名

あなたは、あなたの神、エホバの御名を、虚しく取り上げてはならない。エホバは、御名を虚しく取り上げる者を、罰せずにはおかない。出エ20:7

時として、人の名がすぐには出てこないことがあり、年かな、と思うことがあります。人のイメージはしっかりしているのですが、その人の名がすぐには出てきません。その人のことを忘れていたわけではありませんが、音や文字としての名と、その人本人が即座に結びつきません。しかし、名が出なくとも、その人をエピソードや性格などで説明することは難しくありません。言い訳のように、これは、音や文字の識別記号が名の本質ではなく、その人の性質であることを意味しているからだなどと考えることがあります。

イスラエルの子孫たちは、第二戒によって、聖書の神の御名を大切にせず、そのまま発音せず、読み替えて発音していたため、今では正確な発音が何であったか、正確にはわからなくなっていました。文字の「名」を大切にせず、音韻も、神様の真の性質である愛と知恵がおろそかになったのでしょうか。読み替えはアドナイで「主」を意味し、そして本来の名は、存在を示唆するエホバ、あるいはヤハウエです。

主の祈りの二番目の句は、十戒の第二戒と同じように、「御名が聖とされますように」と「名」に関係します。ちなみに、この御名は、主の神的人間性のことで、「御名が聖とされますように」とは主に近づき主を礼拝せよ、ということです（黙示録啓示 839）。主の祈りの最初の句「天にいます私たちの父よ」で父なる神に心が向けられますが、父なる神は把握することすら不可能であるため、自然的なものをとられ、それを神的人間性にされたイエス・キリストに近づかなければ、私たちは何が神様で、何を大切にしなければならないか、全く理解できません。そのため、父なる神の御名、言葉や行いが聖書で啓示され、その生き方や教えが私たちの理解できる主イエス・キリストを神として礼拝します。これは天界の天使も同じです。

「聖とされる」、この「神聖」のヘブライ語の原意は「特別な目的のために分離する」という意味があり、ギリシア語でも「区別する」の意があります。御名であるイエス・キリストを特別なもの、神的人間として認め、礼拝します。私たちの意識の中で、イエス・キリストは、神的人間であることを確認し、特別なものとして分離して、物質的・世俗的な私たち自身と区別して、その前に跪き、尊いものとして認めます。

著作の中にはこんな表現があります。

「儀式でその御名を呼ばれると、主は存在され、聞かれます。」（真キリ 297）

御名を呼ばれると、そこに主が現存されます。そしてその人が何を言うか、お聞きになります。

驚くべきことです。礼拝において、御名を呼ぶとき、そこには主が現存されるのです。これでは、主の御名には特別の注意を払っておかなければならず、気軽・不用意に口にするわけにはいきません。日本の神社でも、祭壇で鈴を鳴らせば神様が出てきて願いを聞かれる、とされていますが、その前には、鳥居の前で礼をして、鳥居をいくつか通り抜け、神の道である道の中央を避けて歩き、手水舎で手と口をすすいで清めるというプロセスを経ます。私たちの礼拝では、主のみ前に来たことを意識し、祭壇の聖書に礼をして、心の中から世俗的な思いを捨て清くしなければ、社交場に来たのと変わりません。

モーセが神の山ホレブの燃える柴に近づいたときも、「くつを脱げ」（出エ 3:5）すなわち、自然的なもののうち外的なもの・感覚的なものから離れよと（天秘 6844）と命じられました。一人で礼拝するときは、特に易きに流れやすく、本人はそう考えていなくても、自分の都合や自分のものや感覚的なものの中で礼拝していないか、より厳しい吟味と注意が必要です。

「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいる」（マタ 18:20）。これは複数人間が集まるところに主がおられることを意味しておらず、二は善を、三は真理を表し（黙示録解説 532-7）愛と仁愛に関する信仰の教えにいるもの、すなわち、愛と仁愛にいる者（天界の秘儀 2009:11）には、主がともにおられるということを言っています。主のすみかはお自身のもの、すなわち、愛・仁愛、あるいは善にしかおられることができないからです。「わたしの名」とは、主が礼拝される愛の善と信仰の真理のすべてを指します（黙示録解説 532:10）。

「にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」（マタ 24:24）

主には多くの御名がありますが、その中で私たちが最も大切にしなければならないイエス・キリストの御名にあっても音韻自体でしょうか？ たとえば、偽キリストは大勢現れます。しかし、「地獄の悪魔でイエスの名を口にできる者は存在しません。」（真キリ 297）といわれます。私の少ない経験でも、キリストが自分に現れたという方に何人もお会いしましたが、「その方は、イエスと名乗られましたか？」と聞くと、キリストとしか名乗っておらず、イエスという御名を語ったという方は一人もおられず、著作にある通りでした。ただし、「イエス」というお名前も、英語ではジーザス、日本語ではイエス、ほかにもイェシュア、イイス、イエースなど、様々な音があることから単なる音の組み合わせが主の御名ではなく、その音韻によって私たちが想起するその御性質、唱えた本人が理解している御性質によるものと考えます。

すると、新教会の人間は、主こそ天地唯一の神であり、永遠の神エホバが自然界に現れ、その人間性を栄化された・・・ことを知っており、新教会の人間には主がもっとも強くおられるはずですが、残念ながらそうともいえません。やはり主の本質、愛と仁愛の内、善とその形である真理の内におらねばなりません。主は愛と仁愛、善のもとにしか住まわれないし、それ以外は主の本質ではないからです。

そこで豊富な知識の中において、愛と仁愛のもとにいないなら、問題が起こります。「エホバの御名を、虚しく取り上げてはならない。エホバは、御名を虚しく取り上げる者を、罰せずにはおかない。」（出エ 20:7）これは実は、新教会の人間にとって痛烈な戒めです。聖霊に逆らうものが、この世も来世も赦されない（マタイ 12:32）と主がおっしゃっていることも、全く同じ内容を述べています。

「『神の御名』とは、神から来るもの、神であるもの、すなわち神的真理であり、我々にとっては御言葉であり、これは冒瀆してはなりません、なぜならこの中身は神的なものであり、最も神聖なものであるからです。この神聖さが否定されたとき、冒瀆されます。それは軽蔑されたり、否定されたり、おろそかに取り扱われたときがそうです。そうなると、天界は閉じられ、人は地獄に置かれます。なぜなら御言葉は天界と教会を結ぶ

唯一の手段であるからです。そのため御言葉が心から投げ捨てられるならば、結びつきは解かれることとなります。」（黙示録解説 960-14）

御言葉は、主と同じです。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」（ヨハネ 1:1）私たちは御言葉のみから、イエス・キリストの生涯と言動を知り、そしてあらゆる真理を得ます。この御言葉によって、人は天界と結びつきであり、御言葉を否定するならば、天界との結びつきは解かれます。

御言葉の否定は、口先での否定ではありません。口先は外的な否定です。本当の否定は、御言葉によって神的真理を知りながら、その真理を拒否する生き方によってなされます。

「ということは、神の御名は十戒の戒めに反した生き方によって内に冒流されます。・・内的冒流は生き方によってなされ、外的冒流は口によってなされます。」（黙示録解説 962-11）

真理を知りながら、これに従って生きないことが冒流となります。善と偽りが結びつくこと、悪と真理が結びつくこと、これが冒流です。結びついてはならないものが人の中で結ばれると、その人自身が切り裂かれます。天使でも悪魔でもなく、善霊でもなく悪霊でもなくなります。これが「エホバは、御名を虚しく取り上げる者を、罰せずにはおかない。」理由であり、「聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されない」理由です。天使は、善と真理が結合することで、悪魔は、悪と偽りが結合することで、その中に無上の喜びを見出します。冒流はその喜びが存在せず、あらゆる生命とその喜びを奪ってしまいます。

ただ、真理に従って、十戒を行うことは、人間の本来の性に反し、難しいことで、そう簡単にできることではないかもしれません。そしてそれは御言葉の内意を知れば知るほど難しくなっていくかもしれません。自然的意味、霊的意味、天的意味と戒めは奥深く、戒めに真摯に取り組めば取り組むほど、心の奥の、奥底まで自分が悪に染まっていることがわかります。自然的意味のごくわずかしか守れていないかもしれません。それも世間体や保身のためだけかもしれません。あれもだめ、これもだめでは、生きている楽しみが無くなるような気がします。

しかし、こう取り組んでみてはいかがでしょうか。主が禁じられたことの対極には、主が推奨されることがあります。主が行ってもらいたいとされていることを、たった一つでも、進んで行うよう求めて祈るなら、自ずと戒めを守ることになります。一人ではできないことも、主のお力を求めて祈るならば、それは実現します。

「あなたの神、エホバの御名を、虚しく取り上げてはならない。」その逆は、エホバの御名を、取り上げ、実らせることです。エホバの御名とは、主のあらゆる善い性質であり、それを取り上げるとは、その礼拝であり、身を低くして、主の善い性質を祈り求めます。自分の想いを退け、主の善い性質を受けます。

主が望まれておられること、御言葉に心から敬意を払い、その一部であっても大切にします。それにはまず、教会の祭壇にある御言葉、自分の本棚と机にある御言葉、聖書に、謙虚に礼を捧げます。そして自分の欲念を鎮め、主の御言葉に向かい、その一部でも実現するよう真摯に祈ります。わずかな善を行えるよう、少しの悪を拒むことができるよう、主に祈ります。祈りや礼拝は、主がご自分を崇拝してほしいということではありません。主には自尊心などひとかけらもなく、ただ、ただ私たちが愛しておられ、私たちが救うため、実は私た

ち自身が大切にしている悪から私たちを離れさせるため、主の善い性質にあこがれ、それを受け入れてほしいと願っておられます。その主のお気持ちを、自分を低くすることで受け入れます。切にそれを求めて祈るなら、主はそれを与えられ、少しずつ、そしてすべてに広げてゆかれます。

「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」(マタ 18:19) 二人の「二」は、善を意味します。主の善を求めて祈ります。この地上で心一つにして主にその善を祈り求めるなら、主はそれをかなえてくださいます。私たちが善くなりたいと心から願うなら、それを必ずかなえてくださいます。この地上でできる身近な善、まず悪を避けることを主に祈ります。悪を避け、善を行おうというほんのわずかな決心と行動を主に祈り、求めるならば、私たちの内で、主が奇跡の業をお働きになります。

祈るときに、「かすめたもの、足のなえたもの、病気のものを持って来て、ささげ物としてささげて」はなりません。かすめたもの、すなわち、「御言葉から真理を盗み、それを歪曲させ、偽りと悪に適用し、そうすることで真理を消滅させ」(黙示録解説 410-8)、全く善におらず、そのため全く真理にいない(天秘 4320-7)「足なえ」の状態、「病気によって、自身の中に悪以外のなにものも」(天秘 4956) ない状態で、主に祈りを捧げてはなりません。

「わたしの名のために、きよいささげ物がささげられ、香がたかれる」(マラキ 1:11-13)、すなわち、エホバの「性質」である主を礼拝し(天界の秘儀 2009-5)、主から善を行うよう祈りを捧げるならば、望みは必ずかなえられます。

「御名が聖とされますように。み国がきますように」アーメン

マラキ 1:11-13

日の出る所から、その沈む所まで、わたしの名は諸国の民の間であがめられ、すべての場所で、わたしの名のために、きよいささげ物がささげられ、香がたかれる。わたしの名が諸国の民の間であがめられているからだ。

——万軍のエホバは仰せられる——

しかし、あなたがたは、『主の食卓は汚れている。その果実も食物もさげすまれている』と言って、祭壇を冒瀆している。あなたがたはまた、『見よ。なんとうるさいことか』と言って、それを軽蔑する。——万軍のエホバは仰せられる——あなたがたは、かすめたもの、足のなえたもの、病気のものを持って来て、ささげ物としてささげている。わたしが、それをあなたがたの手から、喜んで、受け入れるだろうか。——エホバは仰せられる——

マタイ 18:19-20

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

マタイ 12:31-32

だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。しかし、御霊に逆らう冒瀆は赦されません。

また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません。

真のキリスト教 297

第二戒 あなたは、あなたの神、エホバの御名を、虚しく取り上げてはならない。エホバは、御名を虚しく取り上げる者を、罰せずにはおかない。

その地上的意味、文字上の意味は、神エホバの名を虚しく取り上げるとは、様々な形の会話の中でその名を乱用すること、特に嘘やごまかし、意味のない誓いや宣誓あるいは責任逃れ。さらにはその名をのろいや、まじない呪文という悪い意図をもって使用することです。

戴冠式や司祭への任命式、堅信式で、神やその神聖さ、あるいは御言葉、福音によって誓うことは、後からそれを取り下げない限り、神の御名を虚しくあげることはありません。

さらに、その神聖さの故に、神の御名は教会の神聖な行為、祈りや賛美歌など、さらには説教や教会関係の書籍等、礼拝のあらゆる面で常に使用されます。

その理由は、神は宗教のすべての面におられるからです。儀式でその御名を呼ばれると、主は存在され聞かれます。これらの活動の中では、神の御名は聖とされなければなりません。

神、エホバの御名は、本質的に神聖であり、それはユダヤ人たちが、初期を過ぎると、あえてあるいは今も、エホバの名を口にしない事実からもわかります。

ユダヤ人たちに敬意を表して、福音書作者と使徒たちは、その名を口にしようとしなかったのは、新約聖書の中で、旧約聖書の句を引用する際にみることができ、「エホバ」の代わりに「主」とされています。マタイ 22:37 やルカ 10:27 で引用されている申命記 6:5 などがそうです。

イエスの御名もまた神聖であり、使徒たちが語るとき、その名のもとに、天にあるもの地にあるものすべてが膝をかがめると語ったことによっても知ることができます [ピリピ 2:10]。そのほかには、地獄の悪魔でイエスの名を口にできる者は存在しません。

神には虚しく取り上げてはならない多数の御名があります：エホバ、エホバ神、エホバ・ゼバオス、イスラエルの聖なる方、イエス、キリスト、聖霊。